

参考文献

『旺文社古語辞典 第10版増補版』

松村明 他/編 旺文社 2015年

『広辞苑 第7版』

新村出/編 岩波書店 2018年

『まぼろしは見えなかった』

さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年

『自解100歌選 大西民子集』

大西民子/著 牧羊社 1986年

『無告のうた 歌人・大西民子の生涯』

川村杏平/著 角川学芸出版 2009年

『芭蕉紀行文集 付 嵯峨日記』

松尾芭蕉/著 中村俊定/校注 岩波書店 1979年

『回想の大西民子』

北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年

「短歌」平成6年5月号(追悼特集 大西民子の世界)

角川書店

「波濤」平成7年2月号(大西民子追悼号)

波濤短歌会事務局

2019.11.16 発行

さいたま市立大宮図書館

さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1

電話 048-643-3701

企画展 大西民子の冬のうた

1	原稿「雪の日は まろびて遊び 頬赤き 雪娘なりし 遠き昔よ」
2	原稿「亡き父の マントの裾に かくまはれ 歩みきいつの 雪の夜ならむ」
3	民子、学生時代の手作り作品集 『はるを待ちつゝ』
4	原稿「光りつつ 降る淡雪よ 夜の橋を 幾つ渡りて 行かば逢ひ得む」
5	原稿「霧深き ロンドンの街を ゆける夢 さめて寂しも 身の冷えてをり」
6	色紙「枕木に 雪積もりるし 夜の別れ 呼び戻されむ ことを願ひき」
7	色紙「むらさきに 芽ぐむ木立は 何の木か われはまだ持つ 冬のてのひら」
8	原稿「刷り上げし 書類綴ぢゆく 夜の事務所 マフラーを拵げて 膝覆ひつつ」
9	原稿「タクシーの 窓のガラスの 幅だけの 帯のやうなる 枯れ野を行けり」

常設展 大西民子の生い立ち

1	民子の第三歌集『無数の耳』
2	原稿「てのひらを くぼめて待てば 青空の 見えぬ傷より 花こぼれ来る」
3	原稿「われの名の 不意にやさしく 呼ばるるを ふり返り得ず 涙ぐみみて」
4	短冊「道のべの 紫苑の花も 過ぎむとし たれの決めたる 高さに揃ふ」
5	民子所蔵「百人一首」

大西民子の冬のうた

雪国に生まれた民子の歌には、「冬」や「雪」を詠んだものがあります。

※ 幼いころの自分や家族、故郷を懐かしんだ「冬」のうた

雪の日は まろびて遊び 頬赤き 雪娘なりし 遠き昔よ
亡き父の マントの裾に かくまはれ 歩みきいつの 雪の夜ならむ

奈良高等師範学校時代には、将来への可能性に満ちた青春の日々のなか、歌人・前川佐美雄のもとで短歌に打ち込みました。手作りの作品集『はるを待ちつ』には「旅のうた」と題し、窓から見える山の雪について歌に残しています。

時を経て民子は、刑事の仕事で忙しい父親と、雪道を鳴らしながら元朝参りに出かけたこと。スケート靴を買ってもらい、凍った水田をスケートリンク代わりにして遊んだこと。その幼い頃の自分や家族を懐かしく歌に詠み、「冬」の美しい情景を歌に綴っています。

※ 夫との離婚や家族との別離の苦悩を詠んだ「冬」のうた

霧深き ロンドンの街を ゆける夢 さめて寂しも 身の冷えてをり
むらさきに 芽ぐむ木立は 何の木か われはまだ持つ 冬のてのひら

大宮に移ってからの民子は、帰らない夫を待ち続ける日々や、最後の肉親だった妹の急逝にみまわれた苦しい心境を、「冬」として歌に詠みあげることが多かったようです。

民子は、帰らない夫を待ち続けた日々について、自分の詠んだ歌以上にすさまじい葛藤があり、歌を作り続け、年月をやり過ごす以外の方法はなかったと語っています。

支えあってともに暮らしてきた妹の佐代子を失ったことも、大きな苦しみをもたらし、絶望の底にいるような日々だったと、民子は当時のことを振り返っています。

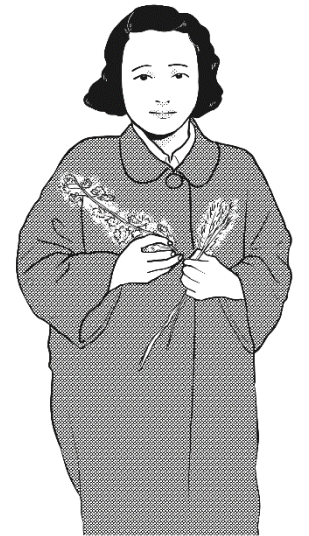
故郷の人々に応援され上京したのに、現実には夫との離婚といった困難の連続が挫折感をもたらし、民子の「冬」の歌へ投影されているのかもしれないと。

※ 仕事を詠んだ「冬」のうた

刷り上げし 書類綴ちゆく 夜の事務所 マフラーを拵げて 膝覆ひつつ
タクシーの 窓のガラスの 幅だけの 帯のやうなる 枯れ野を行けり

民子は職場でも、「冬」をテーマにした歌を詠んでいます。そこからは、戦後すぐの頃の女性が働くことへの困難さや女性の管理職という立場が今以上に厳しいものだったことが伝わってきます。

民子は、埼玉県立文化会館で事務仕事などに携わり、中でも一人で担当していた、文化会館発行の「埼玉文化月報」の仕事は多忙を極めたといいます。図書館に異動になってからも懸命に働いた民子でしたが、体力の限界をむかえており、最後の職場となった県立久喜図書館時代には、タクシーでの通勤を余儀なくされる状態だったといいます。



©仲佳

